

岩手の民俗芸能を
もっとやさしく、もっと楽しく

て 芸 能 わ 俗 門 い 民 入



今や全国的に人気が高まっている民俗芸能であるが、

その種類や芸風は伝承されてきた土地の自然的条件や

歴史的・社会的条件によって独特の民俗芸能が

創り出されている。もとよりすべての民俗芸能が、

その土地において発祥したものではない。

むしろ何らかの動機によって、他の土地から移入され

定着したものが多く、土地の信仰行事に結びついて

人間の長寿を祈願し、五穀豊穡を祈り、また

悪魔や悪霊退散を願って演ずるために伝承されてきた。

人間は、おのれの方の及ばないことに対して、

科学の発達しない時代においては、ただひたすら

自然界や神仏に対して祈りを捧げて解決を願った。

その祈りの手段として演じられたのが民俗芸能であり、

従って民俗行事に関わりの深い芸能であるために

「民俗芸能」と呼ばれ、一般の芸能と区別して

分類されてきたのである。

◎加藤俊夫 岩手県の民俗芸能解説より抜粋。
北上みちのくま能まつり実行委員会発行 炎の伝承・北上みちのくま能まつりの軌跡「所収

いわて 民俗芸能 入門

岩手の民俗芸能を
もっとやさしく、もっと楽しく

CONTENTS

- 03 神楽
山伏神楽／大乘神楽／南部神楽
- 05 大神楽
【全く違う「頭」の意味】大神楽の獅子頭と山伏神楽の権現
- 06 念仏踊
大念仏／剣舞
- 07 鬼剣舞
- 09 鹿踊
太鼓系鹿踊／幕踊系鹿踊
- 11 田植踊
【仮面のある田植踊】～春田打～
- 12 盆踊
さんさ踊／ナニヤトヤラ
- 13 諸芸
奴子踊／虎舞／七つ物／駒踊／太鼓
- 14 「いわて民俗芸能入門」用語解説



神楽

民俗芸能の種類の中で、「神楽」の名称で分類される芸能が最も数多くあります。神楽は、神社との関わりが深く、自然界の営みの中で人間がどうすることもできないことを解決するために、天上の神々に祈りを捧げる手段として演じられた民俗芸能です。岩手県に伝承されている神楽の場合、山岳信仰を中心とした修験道の行者が村々に定着し、その布教の手段として修験者である山伏たちが伝承した「山伏神楽」が最も多く伝えられています。

修験道を源としながらも、神

仏分離によって多くの山伏神楽は神道の影響により仏教色を払拭しました。しかし、今なお発祥当時の芸態を残しているのが「大乘神楽」です。

また、山伏神楽を基本としながらも、演目として歌舞伎や浄瑠璃、民話や伝説などを題材に加えたり、また演ずる方法にも工夫をこらして物語性を持たせ、観客を楽しませるような内容に作り変えた神楽があります。セリフ神楽とも呼ばれますが、ここでは「南部神楽」として分類します。



山伏神楽では必ず「権現舞」が演じられる。



早池峰神楽を代表する岳神楽は、県中央部の花巻市や北上市などに広く伝承する。荒舞の一つ「普勝」。



大乘神楽の特色は手次と踏足にあるが、その伝承されたすべての所作が入っている「櫛舞」。写真は村崎野大乘神楽。



全体的にゆるやかな舞で構成される大乘神楽の中で、荒舞の「正足」を演じる宿大乘神楽。

大乘神楽

(だいじょうかくら)

岩手県内では、和賀地方と県南地方にほとんどが集中し、その土地独特の大乘神楽を伝えてきました。山伏神楽と大乘神楽は元々同じ根をもつ芸能のために、演目の内容に多くの共通点があります。例えば、早池峰神楽の「山神舞」「八幡舞」は、大乘神

楽では「魔王」「地讚」の名称で呼びます。信仰対象も「天照大神」を最高神とする早池峰神楽に対し、大乘神楽では「大日如来」が最高の仏様として崇拝されます。また、早池峰神楽が神道色の強い「動」の神楽とすれば、大乘神楽は、ゆるやかな所作で仏の教えを伝えようとする「静」の神楽とも言えます。

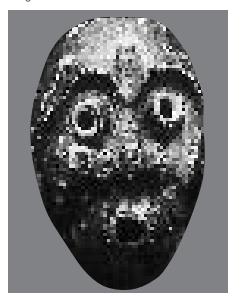
山伏神楽の神楽面

山伏神楽

(やまぶしかぐら)



土沢神楽に伝えられている神楽面で天保6年(1835)の銘がある。



山伏神楽は岩手県内にくまなく分布していて、しかもその芸態は修験道の影響が今なお色濃く残っているものから、仏教色を払拭して唯一神道に近い神楽として演じているものまで、その種類はさまざまです。

しかし、これら山伏神楽に共通しているのは、信仰の基軸になっている「権現」です。神や仏は人間の目に見えない存在なので、人間の目に見えるように具体的な物を一時借用すること、つまり神や仏の仮り姿になって現れることを権現と呼んでいます。山伏神楽の場合の権現は

「獅子頭」であり、この獅子は単なる動物ではなく、神様や仏様が獅子の姿を借りて人間の前にその存在を示していることになります。

山伏神楽のうち、最も広い分布を見せているのが「早池峰神楽」です。修験者集団が霊山の南登山口の岳集落に伝承されている神楽と、南に十二キロ下った大償集落に伝承されている神楽の二つを早池峰神楽と総称しており、昭和五十一年に国の重要無形民俗文化財第一号に指定されました。

南部神楽

(なんぶかくら)

南部神楽と山伏神楽との大きな違いは、南部神楽には獅子頭を持って舞う演目がないことです。山伏神楽では、獅子頭を権現と呼び、それを持って舞う「権現舞」は必ず演じなければならぬ演目です。ところが南部神楽には権現舞が伝わっておらず、祈禱を主目的とする山伏神楽とは違い、庶民の娯楽芸能として定着しました。

南部領内の伝承ではないのに、なぜ「南部」と呼ばれるのかについては、岩手県南を意味するのか、陸中国の南部地方に伝承するからなのか、その理由は明らかではありません。

この神楽が「南部神楽」として確立するのは、神仏分離後の明治時代初期からであり、それ以前に伝承された神楽は、伝承当時には修験道場が伝えた神楽として舞われていたのです。

南部神楽は岩手県南部から宮城県北部にまで広がっている。



達谷窟毘沙門神楽は、集落の主婦が中心となって再興し、今では女性の神楽団体として定着している。

大神楽 たいいかぐら

神楽の名称が付き、獅子頭を用いて演じながらも、その目的や演ずる時期、芸風などが他の神楽とまったく異なっている神楽を「大神楽」と呼んでいます。

大神楽は別名伊勢神楽と呼ばれます。伊勢神宮への信仰は江戸時代に入ってから庶民の間に広まりましたが、ほとんどの庶民は参拝に行きませんでした。そこで「伊勢神楽」が伊勢神宮に

参宮できない人たちのために、その土地に向いて神楽を舞い、参宮の代用を務めたのでした。「伊勢神楽」と呼ばれるのはそのためで、それが「大神楽」へと変わりました。

獅子の威力を借りて厄を払う獅子舞が中心の大神楽は庶民の娯楽芸能として位置づけられ、武技や曲芸など数多くの余技が付属して演じられます。



「大神楽」は、神楽の名称についても、現在では別の種類の芸能に分類されている。それは、演じる対象が神様から人間に代わり、しかも祈禱性より娯楽性に重点が置かれるようになったためである。



大神楽

山伏神楽も大神楽も「獅子頭」は重要な役割を担い、一見同じように見えますが、それぞれの芸能を演ずる目的の違いによって頭の大きさ、表情、演じ方も違ってきます。

山伏神楽の場合、獅子頭は神様の仮の姿「権現」として扱われ、数多くの演目演じる前や後には必ずこの頭を使って「権現舞」を舞う定めになっています。大神楽の場合は、百獣の王である獅子の威力を借りて厄を払う手段として「獅子舞」を舞います。

したがって、頭の表情は、山伏神楽の権現は歯をむき出して威厳があり近寄りたく、大神楽の獅子の表情には親しみが込められています。演じる場合は、権現舞は頭を左手で持ち、右手は歯合わせの場合に使用します。頭の目や耳は固定されていて動きません。一方、大神楽の獅子舞は、頭を右手で操作し、目や耳を動かしながら細やかな表情を表現します。



全く違う「頭」の意味 大神楽の「獅子頭」と山伏神楽の「権現」

豆知識



表情にあどけなさが残る「獅子頭」。



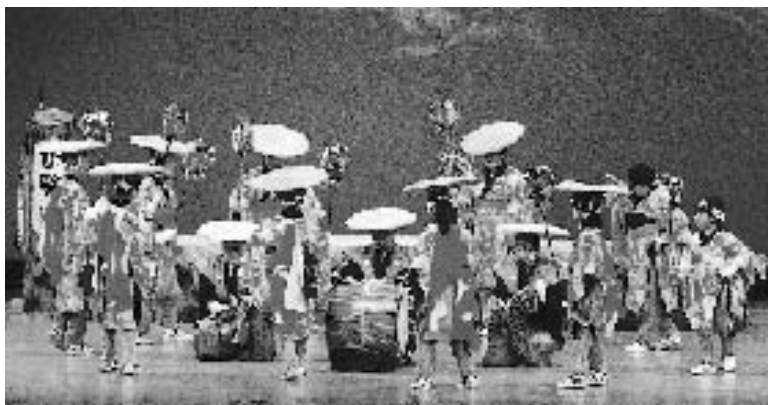
「権現」は威厳があって厳しい表情。

仏 ぶつ

教との関わりの深い芸能を「念仏踊」と呼んでいます。他の種類の芸能と同様に南部領と伊達領によって芸態が異なっています。

空也上人や一遍上人が始めた念仏踊は、浄土（極楽）に生まれ変わることを願い、念仏・和讃を唱えて神懸りのように踊り狂う芸能でしたが、やがて風流化（華麗な衣装や採物の踊りという）して、大念仏、剣舞など種々の芸能が伝承されました。

大念仏の演目の一部を取り上げ、女の子たちが演ずる芸能に仕上げた「雛子剣舞」。



南部領内にも伝承している念仏踊「大念仏」は、直径2メートルほどの大きな笠をかぶって踊る。



大念仏 たいねんぶつ

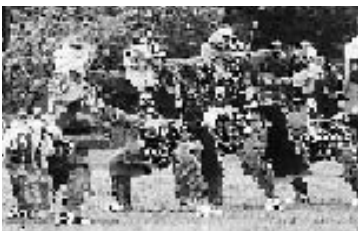
大念仏は、寺院をかたどった大きな「笠」を中心にして、採物を持った踊子が「南無阿弥陀仏」と唱えながら輪踊りをします。用いる大笠は約一・八メートルの大きさで、中央に五重塔を立て、周りに造花が飾られます。県内に三十弱の団体が伝承しています。そのほとんどが盛岡市など県央地方に集中して

います。盛岡市の永井大念仏剣舞は国指定の重要無形民俗文化財になっています。

また、この大笠が省略されて伝承された大念仏もあり、北上市では「雛子剣舞」と呼ばれ、少女によってのみ踊られます。現在二団体が伝承し、いずれも県指定の無形民俗文化財になっています。



念仏踊



南三陸地方独特の剣舞で、鎧を着用し「鎧剣舞」。北上市の立花念仏剣舞は南部領内伝承の剣舞で、は数少ない仮面付き芸能で、優雅な踊りが特徴。写真は川原鎧剣舞。



北上市の立花念仏剣舞は南部領内伝承の剣舞で、は数少ない仮面付き芸能で、優雅な踊りが特徴。写真は川原鎧剣舞。

剣舞 けんばい

阿修羅の踊りを見せる「剣舞」は、仮面をつけない芸能と仮面をつける芸能とに分けられ、この二系統は南部領と伊達領によっておおよそ区分されます。つまり、「仮面のない剣舞」は南部領内に伝承し、伊達領内ではすべて「仮面のある剣舞」です。岩手県内では百団体ほどの団体がいますが、そのうち仮面のない剣舞が約四割、仮面のある剣舞が約六割です。また、剣舞は装束でも分類でき、脱いだ着物を腰に垂らして踊るスタイルを総称して「脱垂剣舞」と呼び、中世の武士のスタイルで踊るものを「鎧剣舞」と呼びます。鎧剣舞は三陸沿岸地方のみに伝承し、滅亡した平家や源義経の亡霊供養を目的としているために、踊手の中に平清盛や源義経が登場します。

「剣舞」は「けんばい」と読みますが、舞（まい）が訛ったものではなく、原義は「反閉（へんばい）」であると言われます。これは修験者の呪法で、悪鬼を踏み鎮める動作のことを指しています。



北上みちのく芸能まつりで毎年行われる「鬼剣舞大群舞」。250名ほどが同時に踊る様子は圧巻。

岩 手県内の念仏踊の中で最も知られている芸能が「鬼剣舞」です。太刀や扇を使い、頭や腰を巧みに動かしながら勇壮に、ときには華麗に踊るこの芸能は、長い伝承の歴史の中で愛され完成された庶民の芸術作品といえます。現在、北上市を中心に十四団体が活動し、札幌、東京、京都にも愛好家の団体があります。その内、岩崎鬼剣舞と滑田鬼剣舞は国指定重要無形民俗文化財に指定されています。

【歴史】

鬼剣舞は仮面をつける脱垂剣舞の一種です。その祖は、大宝年間（七〇一〜七〇四年）に修験道の祖である役小角（えんのおづぬ）が念仏を広めるために、念仏を唱えながら踊ったのが始まりとも言われるなど、諸説あります。しかし、伝承の過程で蝦夷の豪族安倍氏との関わりなどが加わり、先祖供養と共に凱旋踊りとしても踊られるようになり、他の剣舞と芸態が大きく変わって、種類を別に分けています。

この芸能の発祥は北上市の南部領内、今から二百六十年以上前の享保十七年の秘伝書が、

元祖の岩崎鬼剣舞に伝承されています。この地にとどのような経路で伝承されたかは分かりませんが、仮面のある脱垂剣舞は、伊達領内に普及した芸能であり、藩境を越えて定着した芸能であることは間違いありません。



みちのく三大桜名所「北上展勝地」で勇壮・華麗な舞を披露する鬼剣舞。



【面】 鬼剣舞は普通八人で踊りますが、一人が白面、他の七人は青、赤、黒の「阿」「吽」の面をそれぞれつけます。この四色は四季、方位を示すと共に悪魔を降伏させ人々を救済する明王を表わしています。鬼ではなく仏であるために、面には角がありません。このほか、カッカタは大日如来（不動明王）の化身で黄の面をつけます。



「面なし3年、面付けて3年」と言われる踊りは幼児から学ぶ。



◎五大明王

方位	明王名	面の色	季節
中央	不動(ふどう)明王	(黄)	(土用)
東	降三世(ごうざんぜ)明王	青	春
西	大威徳(だいゐとく)明王	白	秋
南	軍荼利(ぐんだり)明王	赤	夏
北	金剛夜叉(こんごうやしや)明王	黒	冬



2枚の膳を落とさないように左右に跳んだり体をひねる「膳舞」。



軽快に宙を舞う一人芸の「狐剣舞」。

【演目】

踊りの演目は多くて十八演目、一般的には十二演目が踊られます。踊りの多くは一番庭のように、引き念仏、早念仏、せんや念仏を唱えての輪踊りを展開します。また三人加護のように祈祷性の強まった踊りや、刀剣舞の狂い踊りのように武技を思わせるもの、膳舞、宙返りのよう

に曲芸の要素も入った踊りもあります。演目は、①一番庭、②一番庭の狂い、③二番庭、④三番庭、⑤三番庭の狂い、⑥刀剣舞、⑦刀剣舞の狂い、⑧一人加護、⑨二人加護、⑩三人加護、⑪八人加護、⑫ムギリ、⑬宙返り、⑭カニむくり、⑮膳舞、⑯カッカタの踊り、⑰胴取りの踊り、⑱狐剣舞の十八演目ですが、演目数は踊組によって異なります。

【装束と道具】

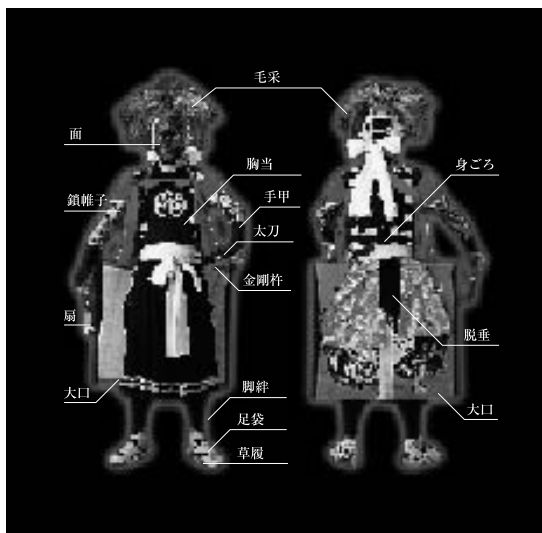
踊手の装束は、毛采をかぶり鬼面をつけ、平口袖、格子模様などの身ごろに胸当（丸に笹りんどうの紋入り）をつけ、赤たすきをかけます。腕には鎖帷子（網）を手甲につけ、広口の袴をはき、後腰にはゴザで裏打ちした大口をつけ、その上に脱垂、太刀をつけます。足には脚絆を巻き、白足袋に切緒の草鞋をはきます。右手に扇を持ち、左手の中指に赤い金剛杵をはさみます。金剛杵とは、古代インドの

武器であり、密教では煩惱を打破する菩薩心の表象として用いたものです。鬼剣舞では赤い小棒で模し、左手中指にはさんで踊りますが、太刀をもって踊るときは使用しません。

【囃子と構成】

通常では太鼓一、手平鉦一、笛二〜四で構成され、踊手は八人ですが、これにカッカタ（道化面）、晴衣の少年（少女）の胴取りが付属するのが本来の姿とされています。囃子は太鼓と笛、手平鉦が受け持ちます。

◎鬼剣舞装束





地面を揺るがす太鼓系鹿踊の大群舞。

鹿踊

太鼓系鹿踊

たいこけいししおどり

この芸能の最大の特徴は、踊手自身が自ら太鼓を打ち、歌も歌い、しかも重さ十五キロの装束を身につけて踊る点であり、一人三役をこなすハードな芸能です。

太鼓系鹿踊の踊手は八人で構成され、踊手の太鼓以外の囃子方はずきません。踊りは三列の体系を組み、その中心に「仲立」というチームリーダー、両脇と



行山流久田鹿踊は、この種の原型・仙台鹿踊から教えられたとの記録がある。

太鼓系鹿踊で最も多い行山流の鹿踊。

太鼓系鹿踊の起りについては、定かではありませんが、行山流久田鹿踊には文禄二年（一五九三年）の伝書があり、歴史が最も古いといわれます。また、行山流から百年ほど遅れて金津流や春日流が起ったとされています。

本

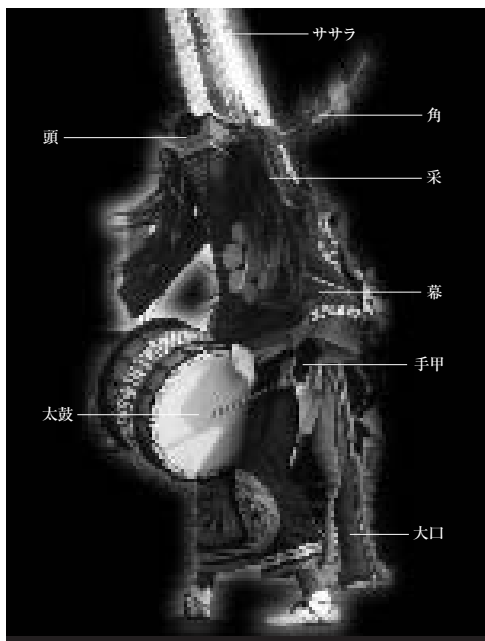
来、鹿踊は鹿の供養のために始められたとされ、念仏踊として伝承されてきましたが、祈禱の目的が多岐にわたり、また芸風にも創作の手が加えられて、住民の娯楽の芸能に変化していきました。

岩手県内の鹿踊は、太鼓系鹿踊と幕踊系鹿踊の二種類が伝承

されています。この二種類の鹿踊は、南部領と伊達領の藩境によつて伝承地が区分され、太鼓系鹿踊は伊達領内、幕踊系鹿踊は南部領内に伝承されています。

しかし、藩境を越えて伝わったものもあり、特に太鼓系鹿踊は藩境に近い南部領内に数多く伝承されています。

◎鹿踊装束



幕踊系鹿踊

まくおどりけいししおどり

幕踊系鹿踊は、遠野市を最南端にすべて南部領内に伝承されています。踊手の全身を幕で覆い、お囃子が別につき、その伴奏によつて幕を巧みに操って踊る鹿踊です。九十団体ほどが伝承されており、岩手県内の鹿踊の約三分の二を占めています。

「頭」の部分の作り方は様々で、写実的な「鹿」であったり「龍」であったり、また「麒麟」もあります。最も多いのは、山伏神楽の影響を受けて抽象化された「獅子」です。また、タテ

ガミに当たる部分の装束の違いによつても区分しています。ドロノキを細長い薄片にして束ねているものを「カンナガラ獅子」と呼び、それが和紙でできているものを「紙サイ獅子」と呼んでいます。

踊手の構成は一般的には八人ですが、中には七人や十二人の団体もあります。更に別の役を持つ踊手が加わって五十人以上の踊手という巨大な芸能構成団体もあります。

菅窪鹿踊は、8人の構成で踊る幕踊系鹿踊の一種である。腰には大口を下げ、頭を外すと念仏剣舞の芸能に変わる。



幕踊系鹿踊は、太鼓系のように共通した装束はない。写真は末角鹿踊。



遠野市に伝承する早池峰獅子踊。



田植踊 (たうえおどり)

田植踊は、米作りの豊作を自然界に祈願するために、農作業が開始されない年の始めの民俗行事として演じられます。予祝芸能と呼ばれるのはそのためで、穀倉地帯の広がる県央地方から県南地方にかけて主に伝承され、その数は県全体の田植踊の八割にも達しています。

しています。北上平野一带には、祈りが主目的で、屋外で踊る「庭田植」が普及しています。一方、屋内で踊る「座敷田植」は盛岡市周辺に広まり、こちらは農民の娯楽芸能に転化しています。また、県北地方には、「えんぶり」と呼ばれる芸能があり、田植の際に田んぼの土を平らにする農具の名称が芸能の名称になっています。



娯楽に重点を置く座敷田植の口内田植踊。



北上市に伝承された荒屋田植踊。北上平野の穀倉地帯には豊年予祝の田植踊が数多く伝承された。

田植踊



「春田打」演目の二番目「種蒔き」。

三番目の「田搔き」では道化などが登場、狂言風に演じ、笑わせる。

仮面のある田植踊

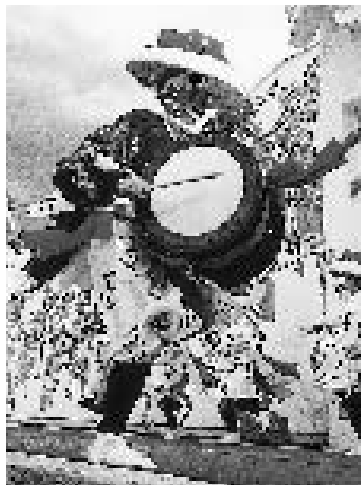
～春田打～

豆知識

仮面をつけて踊る田植踊が県内唯一北上市に伝承されています。「春田打」といい、「お田の神舞」とも呼んでいます。この芸能が特異なのは、他の田植踊系の芸能のほとんどが華やかに風流化されているのに対し、中世の古典芸能のような古風な装束や所作を持ち続けているところです。田打ちから収穫を終え、お田の神が登場するまで、軽快なお囃子に乗って農作業を物まね風に演じます。



お盆の時期に先祖供養のために踊る芸能を「盆踊」と呼んでいます。岩手県内では各種の盆踊が伝承されていますが、ほとんどが南部領内であり、伊達領内には都道府県制度施行後に一部伝承したのみです。これは、伊達領内では鹿踊や剣舞などの念仏関連の芸能が数多く、それが先祖供養の芸能として普及したためと考えられます。南部領内の盆踊は、盛岡市を中心に県央地方に伝承した「さんさ踊」と県北地方の「ナニヤトヤラ」に代表されます。



大衆化によって崩れる踊りの原型を守る黒川さんさ踊り。

南部領内のみに伝承した盆踊の代表的な「さんさ踊り」は盛岡市を中心に広まった。元祖は三本柳さんさ踊りで、動きの激しい芸能だ。

さんさ踊 (さんさおどり)

さんさ踊は休む暇もないほど躍動的で、日本一早いテンポの盆踊といえます。そのルーツは盛岡市の「三本柳さんさ踊り」であり、所作に最も古風な動きを見せてくれます。手先を刀のように切りながら踊る歓喜の踊りは、生産と勝利の喜びを表現していると言われ、南部藩主から伝承を託されたという、由緒のある農民の創作した芸能です。

北上市和賀町に伝承する下藤根さんさ踊。



ナニヤトヤラ

「南部盆唄」や「南部猫唄」とも呼ばれるナニヤトヤラは、これほど徹底して地域に定着している芸能はないと言われ、集落の隅々まで行き渡っています。先祖供養の盆踊としてだけではなく、祭典の際や吉凶禍福に、また普段のときは山や畑、屋内の作業のときも唄がうたわれます。踊りのテンポは緩やかで、厳しい土地で耐え忍ぶ農民を暗示しているようでもあります。

南部氏が最初に領地にした地方で踊られるナニヤトヤラ。



盆踊

奴子踊 (やつこおどり)

奴踊、奴子踊、八士踊などと称する「奴子踊」、また大名行列にみられる奴子の様子から同類とみなす「台笠踊」などが県内に分布しています。

祈りの芸能とは別に、時の領主への祝いの芸として発達した芸能が「奴子踊」です。領主に随行する足軽が、道中で槍や道具類を手際よくさばきながら行進する様子を芸能化したもので、北上や花巻地方を中心に普及しました。かつては一集落に念仏踊、鹿踊と共に三種の芸能を三踊として伝承したといわれています。



農民の怒りや不安をなぐさめるために用いたと思われる立花八士踊。

諸芸 (もろげい)



七つ物 (ななつもの)

県北地方には神楽の一演目を基本に改良を加えて、新しい芸能を創造した団体が多くあります。代表的なものは「七つ物」で、北沿岸地方独特の芸能として普及しました。特に「中野七頭舞」は芸能伝承への努力が実って、東京や北海道など学校教

育の素材となる芸能として取り上げられています。この七つ物は山伏神楽の黒森神楽がルーツと言われ、槍、剣、弓、薙刀など七種類の採物を持ち、しかも七演目を踊ります。踊り手は二人一組になり、七組十四人で構成されます。



沿岸では大神楽から派生した「虎舞」が盛ん。

虎舞 (とらまい)

沿岸地方に伝承されている虎舞は、大神楽が変化した芸能です。扇や手槍、ササラによって虎を興奮させて激しい動きをさせますが、芸能の目的は悪魔払いを行い、大漁を祈願することにあります。また、北沿岸と南沿岸とで芸風が異なり、北沿岸地方では頭や装束は虎そのものですが、南沿岸には大神楽とほとんど変わらない装束で演じている虎舞もあります。

山伏神楽の演目の一部を取り上げて創作された「七つ物」。写真は中野七頭舞。



駒踊 (こまおどり)

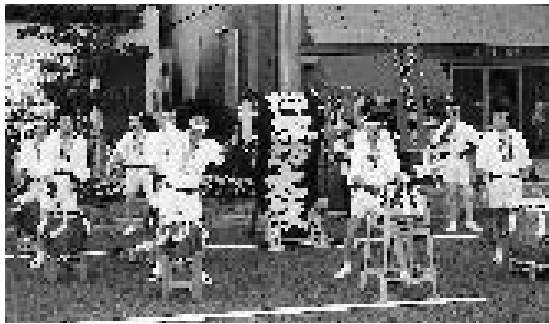


岩手県内に伝承されている「駒踊」は、馬の調教の型の芸能化と言われ、子供たちが踊る。写真はおおの駒踊り。

南部氏が最初に定着した岩手県北と青森県南地方は馬産地として知られ、南部藩が経営する馬の牧場が九カ所ありました。一戸から九戸までの名称がその当時の名残です。

駒踊は、名馬を育てるために馬を調教する型を後世に伝えようと伝承されたとも、戦場における騎馬戦の様子を舞踊化したとも伝えられていますが、いずれにしても岩手県内では子供たちによって伝承されています。

太鼓 (たいこ)



創作が多い中で伝統を守る「御諏訪太鼓」。

岩手県内における和太鼓芸能は、昭和五十年代以降に各地で創造太鼓として誕生した芸能をいいます。伝統ある太鼓芸能は少ないのですが、南沿岸地方の陸前高田市には、祭りの「七夕山車」に付属していた和太鼓が独立した「気仙けんか七夕太鼓」があります。このほか伝統的な和太鼓としては、北上市の「御諏訪太鼓」があります。昭和四十五年、北上市の産土神諏訪神社の門前町の商店街青年部が、長野県の諏訪大社に伝わる伝統太鼓を学び、岩手県内に定着させました。

一遍上人

鎌倉中期の僧で、時宗の祖。各地で民衆に踊り念仏を勧め、全国を回った。北上市には一遍上人の祖父河野通信の墓と伝わる「聖塚」が残っており、一遍が詣でている。

浄土

仏が住む欲望や苦しみのない世界。特に、阿弥陀仏の住む極楽浄土。

和讃

日本語の歌詞による仏徳賛美の歌で、平安時代以降盛んに作られた。

採物

祭りの際に、神主が手に持つ道具。櫛(さかき)や杖(つえ)など、芸能での小道具。

阿修羅

仏教の守護神。常に戦い合う世界の存在ともされる。

予祝

あらかじめ祝うこと。前祝い。

吉凶禍福

めでたい事と悪い事。災難と幸福。

「いわて民俗芸能入門」用語解説

山岳信仰

山を神の宿る場所または祖先の霊が住む所と考えて崇拝すること。

修験道

日本古来の山岳信仰と、仏教の密教、道教などが結びついて平安末期に成立した宗教。山中で修行し、靈験を感得しようとするもので、開祖は役小角(えんのおづぬ)とされる。

修験者・行者

山野を歩いて修験道を修行する人で、山伏とも呼ばれる。

神仏分離

神道と仏教との区別を明確にしようとする、明治初期における政府の宗教政策。神道国教化の方針から、仏教の排斥運動の激化を招いた。

陸中国

現在の岩手県の大部分と秋田県の一部。

空也上人

平安中期の僧で、天台宗空也派の祖。庶民に念仏をすすめ、幅広い信者を得た。諸国を巡って、道路や橋の整備など社会事業に尽くした。

いわて 岩手の民俗芸能を
もっとやさしく、もっと楽しく

民俗芸能

入門

発行◎北上市民俗芸能保存伝承事業実行委員会

監修◎みちのく民芸企画

印刷◎川嶋印刷株式会社

※北上みちのく芸能まつり実行委員会発行「炎の
伝承“北上みちのく芸能まつり”の軌跡」及び
「北上みちのく芸能まつり民俗芸能の解説（平
成14年～16年）」を要約・再編したものです。

※この冊子は財団法人東日本鉄道文化財団から
支援を得て作成したものです。